

『新撰万葉集』 注釈稿 (上巻・冬部・九五〜九七)

津^つ 半^{はん} 澤^{ざわ} 幹^{かん} 一^{いち}
 田^だ 潔^{きよし}

95 涙河 身投量之 淵成砥 凍不泮者 景裳不宿

涙河 身投ぐばかりの 淵なれど こほりとけねば か
 げも宿らず

95 怨婦泣来涙作淵 怨婦泣き来たりて涙淵と作る。

経年 亘月臆揚煙。 年を経^へ月を亘^{わた}りて臆煙^{おぼ}を揚ぐ。
 冬閨両袖空成泣。 冬閨両袖空しく泣^なと成る。
 引領望君幾数年。 領^{くび}を引き君を望むこと幾数年ぞ。

【校異】

本文では、永青文庫本と久曾神本が、第二句を「身縮投置芝」、結句の「景」を「影」とし、結句末に「洲」を補う。第四句の「泮」を、京大本・大阪市大本・林羅山本・無窮会本が「洋」とする。

付訓では、第二句の「なく」を、底本の左訓および藤波家本・和学講談所本・道明寺本・京大本・大阪市大本・林羅山本・無窮会本は「すつ」、天理本は「すつる」とする。第四句の「とけねば」を、和学講談所本・道明寺本・京大本・大

【校異】

「涙作淵」を、藤波家本「作淵」に作る。「経年」を、底本始め諸本「往年」に作るも、類従本・羅山本・無窮会本・永青文庫本・久曾神本に従う。また、「往」に、「経」の異文を注記する諸本あり。「臆揚煙」を、藤波家本「臆掃煙」に作る。「空成泣」を、諸本「空成涙」に作り、永青文庫本・久曾神本「空成河」に作るも、藤波家本・和学講談所本・道明寺本・林羅山本に従う。

阪市大本・天理本・林羅山本は「とけぬは」とする。

同歌は、寛平御時后宮歌合（十・二十卷本、冬歌、一三九番）にあり（ただし十・二十卷本とも第三句「淵はあれど」、二十卷本では第四句「氷とけぬは」結句「影もみえず」）、後撰集（巻八、冬、四九四番）に「題しらず よみ人しらず」として（ただし第三句「ふちはあれど」結句「ゆく方もなし」）、また秋萩集（二三番）にも見られる（ただし第三句「ふちはあれど」第四句「こほりとけば」）。

【通釈】

涙の河は身を投げるのできるほどの（深さの）淵であるけれど、氷が解けないので、（相手の）面影さえとどまっていない。

【語釈】

涙河 涙を河に見立てた、この語は万葉集には見られない。ただ、「み立たしの島を見る時にはたづみ流るる涙止めそかねつる」（万葉集二一七八）「：聞けば悲しみ にはたづみ 流るる涙 留めかねつも」（万葉集一九一四二一四）などのように、涙を「にはたづみ」という激しい流水にたとえる表現は見られる。「涙河」は古今集以降、とくに恋歌においてさかんに用いられ、本集の恋歌にも「人しれず下に流るる涙河せきとどめてむかげや見ゆると」

【通釈】

夫と離ればなれになった女性が泣き続けて、その涙が深い水たまりになった。何年、何ヶ月にもわたって、胸の鬱屈した思いが烟を上げている。冬の寝室では、涙に濡れた両袖がむなく凍りついてしまった。首を長くして夫の帰りを待ち望むことが、一体何年になることだろう。

【語釈】

怨婦 夫に会えない怨みを抱き続ける女性。ここでは、結句の「君」を待ち続ける女性。本集二四番詩【語釈】該項参照。唐・魏蕃「諫納李孝本女疏」に「出後宮之怨婦、匹在外之鰥夫」とあるなど、唐代以後の語。菅原清公「奉和春閨怨」詩に「怨婦含情不能寢、早朝褰幌出欄楯」（『文華秀麗集』卷上）、滋野貞主「奉和御製江上落花詞」に「去馬飛禽綵色備、怨婦看憐欲寄遠」（『雜言奉和』）とある。泣來その語例を日中共に知らない。「來」は、この場合、ある時点から今までの意を表すと考えるべきか。本集九〇番詩【語釈】該項参照。涙作淵 「淵」は、深い水たまりを意味するから、涙が大量に流れたこと。ただし、その類似表現を日中で未だ見出し得ない。ただし、本集には類句が多く、「夜半潜然淚作泉」（一〇一番）、「恋慕此山淚此河」（一〇二番）、「落淚成波不可乾」（一〇四番）、「落淚交

(一一四番)「涙河流れて袖の凍りつさ夜ふけゆけば身のみ冷ゆらむ」(一一五番)の二例が見られる。八代集において、恋歌としてではなく、当歌のように四季歌として見出せるのは、後撰集における冬歌の同歌と秋歌の「きえかへり物思ふ秋の衣こそ涙の河の紅葉なりけれ」(後撰集六一三三三)のみである。身投ぐばかりの「投(な)ぐ」という動詞は万葉集では「たぶてにも投げ越しつべき天の川隔てればかもあまたすべなき」(万葉集八一五二二)の一例があり、その対象は「たぶて」つまり石であるが、八代集になると、一二例すべてが「身」を対象とした用法になっている。「身」をどこに「投ぐ」というと、「恋ひわたる涙の川にみをなげんこの世ならでもあふせありやと」(千載集一一七二五)「としごと」に涙の川にうかべどもみはなげられぬ物にぞありける」(千載集一七一〇六三)のように、当歌と同様の比喩的な「涙の川」を含め、「世中のうきたびごと」に身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ」(古今集一九一〇六一)「河ぎしのをどりおるべき所あらばうきにしにせぬ身はなげてまし」(拾遺集七四〇一)「おほる川となせのときに身をなげてはやくと人にいはせてしかな」(千載集一七一四三三)「恋ひわびぬちぬのますらをならなくにいくたの川にみをやなげまし」(千載集一一一

『新撰万葉集』注釈稿(上巻・冬部・九五〜九七)

横潤斗筭」(一一四番)などとある。経年 年数が経つことで、歳月の積み重なりを意味するが、それは時に、ある時点からずっと今まで、何年か前からずっと、年来、の意を表す。梁・何遜「范広州宅聯句」に「洛陽城東西、却作経年別。昔去雪如花、今来花似雪」とあるのは、昔別れたきりずっと会っていないのであり、白居易「長恨歌」に「悠悠生死別經年、魂魄不曾入夢」というのも、楊貴妃と死別したきり夢に見ることもないのであり、劉媛「長門怨」詩に「経年不見君王面、花落黄昏空掩門」とあるのも、君王とは何年か会っていないというのである。嵯峨天皇「冷然院各賦一物得潤底松」詩に「鬱茂青松生幽澗、経年老大未知霜」(『文華秀麗集』卷下)とある。異文「往年」は、梁簡文帝・蕭綱「隴西行三首其三」詩に「往年郢支服、今歲单于平」とあるように、昔、以前と同様で、過去のある時点を表す。白居易「曲江感秋二首其二」詩に「今日臨望時、往年感秋処」とあるが、その「序」には、「元和二年三年四年、予每歲有曲江感秋詩、…今遊曲江、又值秋日、風物不改、人事屢變。況予中否後遇、昔壯今衰、慨然感懷、復有此作。…時(長慶)二年七月十日云耳」とあり、菅原道真「慰少男女」詩に「往年見窮子、京中迷失捩」(『菅家後集』)、具平親王「読諸故人旧遊詩有感」詩に「往年歡与当時怨、世事皆如風裏雲」

七三三) などのように、谷や川が多く、「おなじくは君とならびの池にこそ身をなげつとも人にきかせめ」(後撰集一二八五五)の池もある。「身投げ」といえば、普通は水中に飛び込んで死ぬことを意味するが、他にも「身なぐとも人にしられじ世中にしられぬ山をしるよしもがな」(後撰集一六一六三)「世中にしられぬ山に身なぐとも谷の心やいはおもはむ」(後撰集一六一六四)の山、「有りとてもいく世かはふるからくにのとらふすのべに身をもなげてん」(拾遺集一九一二二七)の野辺なども見られる。【校異】に示したように、底本の左訓などでは「なぐ」が「すつ」になっている。その対象として、八代集には「身をすててゆきやしにけむ思ふより外なる物は心なりけり」(古今集一八九七七)「身をすてて山に入りにし我なればくまのくらはむこともおぼえず」(拾遺集七三三二二)「みをすててふかきふちにもいりぬべしその心のしらまほしさに」(後拾遺集一一六四七)などのように、八代集の「すつ」の用例の三分の一に「身」が見られ、「投ぐ」とほぼ似た用法になっている。淵なれど「淵(ふち)」は水が澱んで深いところを表す。万葉集にはその単純語の例として「我が行きは久にはあらし夢のわだ瀬にはならずて淵にありこそ」(万葉集三三三五)の一例があり、流れて浅いところを表す「瀬

(『本朝麗藻』巻下)とある。ここは、起句の「泣来涙作淵」という表現を支える、歳月の累積表現が是非とも必要なので、「往年」は非。巨月 何ヶ月にもわたつて、の意。その語例は極めて稀。梁・沈約「懺悔文」に「晨判暮爚、巨月随年、赚腹填虚、非斯莫可」、唐・高宗「遺詔」に「巨月竈以覃正朔、匝日城而混車書」と見えるのみ。恐らく、隋・薛道衡「予章行」に「豊城双剑昔曾離、経年累月復相随」とある、「経年累月」に近い表現で、歳月の長久を表現したものであろう。あるいは、嵯峨天皇「清涼殿画壁山水歌」詩に「度歳横琴誰奏曲、経年垂釣未得魚」(『経国集』巻一四)、桑原腹赤「雑言奉和清涼殿画壁山水歌」詩に「秋花荻浦経年白、春色桃源度歳紅」(『経国集』巻一四)とある、「経年」の対語として用いられる「度歳」の「度」と、「亘」は和訓が同じなので、それを意識したものか。ちなみに、「度歳」も和製か(小島憲之『国風暗黒時代の文学』下冊三九四六頁による)。臆揚煙 「臆」は、賈誼「鵬鳥賦」に「鵬迺歎息、举首奮翼、口不能言、請対以臆、請以臆中之事以対也」(『文選』卷一三)とあるように、思い、こころ、の意もあるが、閨怨詩では沈約「昭君辞」詩に「沾妝疑湛露、繞臆状流波」(『玉臺新詠』卷五)、梁・何遜「詠鏡詩」に「蕩子行未帰、啼粧坐沾臆」(『玉臺新

（せ）と対で用いられている。八代集においても、「そこひなきふちやはさわぐ山河のあさきせにこそあだなみはたて」（古今集一四七二二）「ほかのせはふかくなるらしあすかがは昨日のふちぞわが身なりける」（後撰集九一五二五）「山河はきのはながれずあさきせをせけばふちとぞ秋はなるらん」（拾遺集七三六八）などのように、深淺という点で「ふち」と「せ」が対比される歌が目につく。【校異】に示したとおり、寛平御時后宮歌合などの他集では、「なれど」という訓が「はあれど」になっている。「淵なれど」ではその川のどこもが淵となるが、「淵はあれど」なら實際がそうであるように、淵もあれば瀬もあることを含意するからであろう。もつとも、当歌においてその対比の含意が重要性を持つとはとくに考えられない。第二句の「身投ぐばかりの」という修飾句は、「ふち」の深さのほどを、つまりは涙の量かつ嘆きの程度を表している。「涙河」に関して用いられた「ふち」は、八代集では「せきもあへず淵にぞ迷ふ涙河わたるてふせをしるよしもがな」（後撰集一三一九四六）「淵ながら人かよはさじ涙河わたらばあさきせをもこそ見れ」（後撰集一三一九四七）の二例が見られる。こほりとけねば 動詞「とく」が氷に関して用いられる例は万葉集にはなく、八代集には「とく」五三例中、一五例見られ

詠（巻五）とあるように、かえって胸そのものの意で用いられることが多い。空海「故贈僧正勤操大徳影讚」に「三論満懐悲幻影、一乗韜臆愛梁津」（『性靈集』巻一〇）、島田忠臣「乞紙贈隣舎」詩に「満臆秋懷蓄似雲、唯因無紙鬱紛紛」（『田氏家集』巻上）とあり、後者は胸の意。「揚煙」とは、煙が上がること。孫綽「遊天台山賦」に「法鼓琅以振響、衆香馥以揚煙」（『文選』巻一一）、顧況「帰陽蕭寺有丁行者能修無生忍担水施僧況帰命稽首作詩」に「蕭寺百余僧、東廚正揚煙」とあり、大江匡衡「観右親衛藤原相述懷詩不改本韻依次奉和」詩に「青雲難得路、白屋不揚煙」（『江吏部集』巻中）とある。あるいは、この比喩は仏教に由来するか。本集にも「胸中刀火例焼身、寸府心灰不挙烟」（一〇七番）とある。冬 閨 冬の閨房。梁・簡文帝「七励」に「冬閨温煦、夏室含霜」とあり、本集にも「冬閨独臥緑衾單、流淚凍來夜半寒」（一一五番）とある。また、「秋 閨」（六〇番）の語があった。両袖 怨婦の両袖。謝惠連「擣衣」詩に「微芳起兩袖、輕汗染双題」（『文選』卷三〇、『玉臺新詠』卷三）、宋「讀曲歌八十九首其一七」詩に「穀衫兩袖裂、花釵鬢邊低」とあり、島田忠臣「賦得秋織」詩に「香飛兩袖隨梭乱、汗湿双題逐縷垂」（『田氏家集』巻上）とある。空成五 「互」は、「互」にも作る。

る。「とく」には下二段の自動詞と四段の他動詞の用法があり、当歌と同じく、打ち消しを伴う自動詞の例としては、「思ひつつねなくにあくる冬の夜の袖の水はとけずもあるかな」（後撰集八四八二）「霜のうへにふるはつゆきのあさ水とけずも物を思ふころかな」（拾遺集四二二九）「つながねどながれもゆかずたかせぶねむすぶこほりのとけぬかざりは」（金葉集四二九六）などがある。涙に関連させた「こほり」の例としては、「春かぜのふくにもまさる涙かなわがみなかみに氷とくらし」（新古今集一一〇二〇）の他、「袖」を介して間接的に涙を表す、上記の後撰集の例や「かたしきの袖の水もむすほはれとけてねぬよの夢ぞみじかき」（新古今集六一六三五）がある。かげも宿らず「かげ」については、一三番歌【語釈】「花のかげかも」の項、七九番歌【語釈】「影だに見えで」の項および八九番歌【語釈】「影見し水ぞ」の項を参照。「かげ」が「宿（やど）る」という動詞と結び付く例は万葉集にはなく、八代集でも拾遺集以降に、「久方のあまつそらなる月なれどいづれの水に影やどるらん」（拾遺集八四四〇）「すめばみゆにこればかくるさだめなきこのみや水にやどる月かげ」（千載集一九二二四）「くもりなくちとせにすめる水の面にやどれる月の影ものどけし」（新古今集七二二）などが見ら

寒さで水が凍ること。張衡「思玄賦」に「行積氷之磴磴兮、清泉汜而不流」（『文選』卷一五）とあり、旧注は「汜、凍也」という。潘岳「懷旧賦」に「轍含水以滅軌、水漸軻以凝汜」（『文選』卷一六）とある。異文「涙」は、その草体と「汜」や「汜」の俗体「冴」との類似から生じたもの。異文「河」も、その草体との混同だろう。『新撰万葉集注釈 卷上(二)』は、「河」の本文を取るが、このの主語は「両袖」であることは自明であり、成立するわけがない（本集にも「涙河流れて袖の凍りつつ」（一一五番歌））。涙を大量に含んだ「両袖」が、「冬閨」の寒さで凍りつくのであり、それが「氷」ではない「汜」を用いた理由であるように思われる。大江匡衡「七言初冬於左親衛藤原将亭同賦煖寒飲酒」序に「醉郷氏之國、四時独誇温和之天、酒泉群之民、一頃未知汜陰之地者也」（『和漢朗詠集』酒）とある。引領 首を長くして遠くを望み見ること。「引」は、伸ばす意、「領」は、「項」の意で、うなじやくびのこと。語は、『左氏伝』成公十三年に「我君景公、引領西望曰、庶撫我乎」とあるに基づく。「古詩十九首其一六」詩に「眇眇以適意、引領遙相睇。徙倚懷感傷、垂涕沾双扉」（『文選』卷二九、『玉臺新詠』卷一）、「古詩十九首其一九」詩に「引領還入房、淚下沾裳衣」（『文選』卷二九、『玉臺新詠』卷一）とあり、島

れる。これらからも明らかのように、そのほとんどは月の影が水に「宿る」という表現であり、「なつのよの月はほどなくいりぬともやどれる水にかけをとめなん」（後拾遺集三二二三）「さもこそはかげとどむべき世ならねどあとなき水にやどる月かな」（千載集一六一〇一二）「面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしのそでの涙に」（新古今集一二一三二六）などのような「月」だけの場合と大差なく、ともに月の姿が水に映ることを指している。当歌においては何の「かげ」か特定されていないが、以上の例に徴する限りでは、月とするのが順当かもしれない。しかし、上句の「涙河」との関係からは、単に月とするだけでは納得しがたく、七九番歌と同じく、相手の面影とみなすのが妥当と考えられる。『新撰万葉集注釈 卷上(二)』はこの句にたいして「相手が自分のもとへ通ってこない」「姿も見せない」と解するが、当歌単独でそこまでの含意を積極的に認めるだけの根拠に乏しい。

【補注】

当歌は、上句と下句の関係をどのようにとらえるかが難しい。後撰集所載の同歌の結句が「ゆく方もなし」となっているのは、淵となつている深い河は身投げするには格好の場所なのに、凍っているために、そうすることも叶わず、どこに

『新撰万葉集』注釈稿（上巻・冬部・九五―九七）

田忠臣「同菅侍郎醉中脱衣贈裴大使」詩に「此物呈君縁底事、他時引領暗愁生」（『田氏家集』卷中）とある。本集にも、「寂寂空房孤飲淚、時時引領望荒庭」（二二一番）とある。望君 出ていったきり帰らぬ夫を待ち望むこと。漢楽府「東門行」に「吾去為遲。平慎行。望君婦」、魏・繁欽「定情詩」に「逍遙遙莫誰覩、望君愁我腸。…望君不能坐、悲苦愁我心」（『玉臺新詠』卷二）、宋・鮑令暉「古意贈今人詩」に「日月望君婦、年年不解綰」（『玉臺新詠』卷四）などである通り、閨怨詩の常套語。幾数年 一体どのくらいの年数になるのだろうか。謝惠連「祭古冢文」に「追惟夫子、生自何代。曜質幾年。潛靈幾載」（『文選』卷六〇）、北周・庾信「別周尚書弘正詩」に「此中一分手、相逢知幾年」とあるように、「幾年」はあり、阮瑀「為曹公作書与孫權」書に「抱懷數年、未得散意」（『文選』卷四二）と、「數年」は無論あるけれども、「幾數年」の語例は日中ともに検出し得ない。知るのは本集に「消息絶來幾數年」（二〇八番）とあるのみ。恐らく、「數」は字数を整えるための衍字。

【補注】

韻字は、「淵・煙・年」で、下平声一先韻。平仄にも基本的誤りはないが、「年」字が二度使用されるなど、初歩的な

行けばいいのか分からない、のように一貫性を持たせようとした結果であろう。

当歌では「かげも宿らず」の理由として第四句の「こほりとけねば」を挙げるが、七九番歌の「ほりておきし池は鏡と凍れども影だに見えて年ぞへにける」や「夜をかさねむすぶ氷のしたにさへ心ふかくもやどる月かな」（千載集六一四三八）などのように、凍った川にも影が宿るという設定も、一方ではありうる。また、上句からのつながりでいえば、「淵」だからこそ影が宿るはずなのという前提があると読めるが、川の深浅によってその違いがあることを示す例も認められない。

そもそも当歌において「涙河」が生じたのは、その一般的な用法から、恋の思いによるものであろう。これを下句と関連付けるとすれば、こんなに思っているのに、「かげも宿らず」ということであり、助詞「も」が意味するのは、相手自身はもとより、その面影さえも見えないということである。当歌が内容的には明らかに恋歌であるにもかかわらず、冬歌に属するのは、ただ第四句の「こほりとけねば」による。ここに、相手がうちとけないという意を重ねてとらえる立場※

ミスもある。末字の「年」には、本字である「季」を使用する写本版本が数本あるが、あるいはそれと関係するのかもしれない。

当詩は、歳月の長さを言う「経年巨月」と「幾数年」とが第二句と第四句に使用され、内容的な展開も新規性・意外性に欠け、「引領」「望君」と意味的に重複する語句が連続し、第一句の「涙作淵」、第二句の「臆揚煙」、第三句の「空成泣」の内容が、それぞればらばらに記述されているだけで有機的関連が全くないこと等々、基本的作品構成の稚拙さが目立つ。

そもそも内容的には閨怨詩そのものであって、当詩が次の恋の部に収められても何の問題も無からう。当詩が冬の部に存在する唯一の根拠は、言うまでもなく第三句の「冬闌」にあるだけである。

※があるが、この氷は自らの涙河に関するものであって、相手には関係しないのみならず、それではますます四季歌としての意味合いを希薄化することになると考えられる。

【比較・対照】

図らずも、歌と詩のそれぞれの【補注】が、当該作品がこの冬の部立の中にあるのは、「こほりとけねば」と「冬閨」という語句にあるだけというように、両者とも冬という季節とは縁が薄く、恋愛あるいは片恋的という意味で共通する内容を持つ。その意味から言えば、詩は和歌の内容や背景をよく説明していると考えてよいのかもしれない。従来あつた和歌と漢詩の関係の中でも、漢詩は和歌によく寄り添っている、あるいは注釈しているとさえ言えるだろう。

歌と詩の対応をおおまかに考えれば、歌の上の句が詩の第一句に対応し、歌の下の句が詩の後半二句に対応することになる。まず、漢詩は和歌の主体が「怨婦」であると明言する。「身投ぐばかりの淵」は、その女性が「泣き来たりて涙」が作つたものだという。なぜそんなに大ごとになったのかという質問には、何年も何ヶ月にもわたって、逢えない苦しみ胸を焦がしてきたからだと説明する。また、和歌では「こほりとけねば」と、上の句の比喩の文脈を引きずるけれども、漢詩では「冬閨」と現実に取り戻して、涙で濡れた「両袖」が凍りつくのだと解説する。更に「かげも宿らず」というのは、「月」が映らないのではなく、夫の姿が映らないのであり、だから首を長くして何年も待ち望んでいるのだと言いたいのではあるまいか。

さて、和歌全体の内容を規定することとなっている「涙河」という強烈な個性を持つ言葉は、どこから来たのだろうか。従来北宋の詩人・蘇軾「和王旂二首其一」詩に「白髮故交空掩卷、淚河東注問蒼旻」とあり、その典拠には、杜甫「得舍弟消息」詩に「猶有淚成河、經天復東注」とあるのが指摘されるのみであったが、後魏・温子升「臨淮王彧謝封開府尚書令表」に「空復受戈清廟。推轂朱門。効闕淚河。功慚汗海。大宝遂隆。橫草未樹。（空しく復た戈を清廟に受け、轂を朱門に推す。効は涙河に闕け、功は汗海に慚ず。大宝は遂に隆んに、横草未だ樹たず。）」（『藝文類聚』卷四十八・尚書令）とある。

これと、恋歌とを結ぶ線は、未だ検出していない。あるいは、六国史等の編纂の過程でヒントを得たかとも思われるが、まだ憶測の域を出ない。対語「汗海」でも分かる通り、色恋とは無縁の表現から転用されたとすれば興味は尽きない。なお、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、平成三年刊）五七九頁以下を参照のこと。

96 為君 根刺將求砥 雪深杵 竹之園生緒 別迷鉤

君が為 根刺し求むと 雪深き 竹のそのふを わけまどふかな

96 雪中竹豈有萌芽。 雪中の竹豈に萌芽有らむや。

孝子祈天得筍多。 孝子天に祈りて筍を得ること多し。
殖物冬園何事苦。 物を殖えたる冬の園に何事にか苦なる。

【校異】

本文では、第二句の「將」を、京大本・大阪市大本・天理本・永青文庫本・久曾神本は欠く。結句の「別」を、林羅山本・無窮会本・永青文庫本・久曾神本は「係」とする。

付訓では、第二句の「もとむ」を、元禄九年版本・元禄十二年版本・文化版本は「もとめむ」とする。結句の「わけ」を、林羅山本と無窮会本は「かけ」とする。

同歌は、他集には見当たらない。

【通釈】

あなたのために根(筍)を求めようと(その場をめざすものの、そこがどこなのか)雪の深く積もる竹園をかき分けるのに困惑することだよ。

【語釈】

君が為 この表現は万葉集から見られ、「君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも」(万葉集七一・二四九)「君がため山田の沢にまぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」(万葉集一〇一・一八三九)、「君がため春ののに

【校異】

「有萌芽」を、京大本・大阪市大本・天理本「肖萌芽」に作り、林羅山本・永青文庫本「有萌芽」に作る。「得筍多」を、藤波家本「得簡多」に作る。「殖物」を、類従本「残物」に作り、「殖」の左傍に「残」を注記する本あり。「冬園」を、京大本・大阪市大本・天理本「冬園」に作り、永青文庫本・久曾神本「園」を欠く。「何事苦」を、京大本・大阪市大本・天理本「何事芳」に作る。「帰歎」を、永青文庫本・久曾神本「婦郷」に作り、「哭還歌」を、京大本・大阪市大本・天理本「笑還歌」に作る。

【通釈】

雪の(積もる真冬の)竹に、どうしてその芽であるタケノコが出るであろうか、あるわけがない。(しかし)孝行息子の孟宗は、天に祈り求めて、タケノコをたくさん手に入れることができたということだ。(だから)ものを冬の畑で植え殖やすことなどにどうしてあれこれ悩むことがあるろう。

帰歎行客哭還歌。 帰歎の行客哭して還た歌ふ。

いでてわかたむわが衣手に雪はふりつつ」(古今集一、二一)「君がためうつしてうるくれ竹にちよもこもれる心地こそすれ」(後撰集二〇―一三八二)などのように、初句に来ることが多い。「君(きみ)」はとくに主君とする要素が見当たらないので、二人称代名詞と見ておく。根刺し求むと「根刺(ねざ)し」は、根が「刺す」つまり地中に伸びるの意で、名詞形としては、その伸びた根のことを表す。

万葉集には名詞としても動詞としても、その例がなく、動詞の類似表現としては「奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも」(万葉集三三三九七)の「深(ふか)む」や「磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり」(万葉集一九四一五九)の「延(は)ふ」が用いられている。八代集には動詞の例はあり、「千世へむと契りおきてし姫松のねざしそめてしやどはわすれじ」(後撰集一一一七九二)や「かくれぬのしたよりねざす あやめぐさ」(拾遺集九一五七二)など、マツやアヤメ草に用いられることが多い。当歌の「根刺し」が何の根かは、第四句の「竹のそのふ」から、タケの根となろうが、それではなぜ求めるのが不明である。地中で伸びるという意味で、タケノコとみなされる。「たけのこ」の語は「今更になにおひいづらむ竹のこのうきふししげき世とはしらずや」(古今集一八

かの聖人孔子は(諸国遍歴の途次、絶望して)故国に帰ろうという嘆きを漏らした人だが、(帰国後も愛弟子の顔回、子路が亡くなったときには、天が我を見捨てたと)慟哭し、また慨嘆の歌を歌った。(しかし、孔子の死後その弟子たちが諸国で彼の考えを広め、『論語』を編纂し、後世に至聖と称されるまでになったと言うことは、天は孔子を見捨てず、彼の言う道が世に行われたということになるだろう。)

【語釈】

雪中 雪の降り積もる中、の意。「雪裏」とも。梁・庾肩吾「歳尽応令詩」に「梅花応可折、情為雪中看」、陳・江総「梅花落」詩に「楊柳條青樓上輕、梅花色白雪中明」とあり、菅原道真「雪中早衙」詩に「風送宮鐘曉漏聞、催行路上雪紛紛」(『菅家文章』卷一)、菅原道真「臨別送鞍具総州春別駕」詩に「山行莫忘浮雲上、歳暮当思踏雪中」(『菅家文章』卷二)、菅原道真「立春」詩に「誣告浪従水下動、暗思花在雪中開」(『菅家文章』卷四)とある。豈有「豈」は、疑問・反語を表す助字。どうして〜ということがあろうか。『礼記』檀弓上に「君謂我欲弑君也。天下豈有無父之国哉」、宋玉「風賦」に「今子独以為寡人之風、豈有說乎」(『文選』卷一三)とあり、朝野鹿取「奉和春闈怨」詩に「水上浮萍豈有根、風前飛絮奈無蒂」(『文華秀麗集』卷

一九五七)「よのなかにふるかひもなきたけのこはわがつむとしをたてまつるなり」(詞花集九一三三二)など見られる。「求(もと)むと」の形の表現は、「むささびは木末求むとあしひきの山の狛雄にあひにけるかも」(万葉集三二二六七)「春されば妻を求むとうぐひすの木末を伝ひ鳴きつともとな」(万葉集一〇一八二六)、「はるののにところもとむというなるはふたりぬばかりみてたりやきみ」(拾遺集一六一〇三二)など見られるが、その対象として「根刺し」あるいは「たけのこ」をとる例は見いだせない。雪深き雪にたいして「深し」と形容する例は万葉集には見られないが、八代集には「雪ふかき山ぢになにかへるらん春まつ花のかげにとまらで」(拾遺集四二二五九)「ゆきふかきみちにぞしるきやまざとはわれよりさきに人こざりけり」(後拾遺集六一四一一)「雪ふかきいはのかけ道あとたゆるよし野の里も春はきにけり」(千載集一一三三)などあり、道における表現として見られる。竹のそのふを「そのふ」は、「その(園)」と同じく、栽培庭園のことであり、「竹のそのふ」はタケを栽培する庭園をいう。この形で出てくるのは、「ひくるればたけのそのふにぬるとりのそこはかとなくねをもなくかな」(続古今集一九一七八八)「つたへこし代代の跡をも尋ねみつ竹のそのふの庭のしら雪」(続千載

中)、菅原道真「重依行字和裴大使被誚之什」詩に「千年豈有孤心負、万里当憑一手章」(『菅家文章』卷二)とある。萌芽 草木が初めて芽を出すこと。『礼記』月令に「仲春之月、…是月也、安萌芽、養幼少、存諸孤」とあり、その正義は「萌芽」を「萌芽」とする諸本があることを言った後、「按依説文萌芽字作芽、从艸牙声、古多以牙為芽」という。東方朔「非有先生論」に「甘露既降、朱草萌芽」(『文選』卷五二)、惟氏「雜言和出雲巨太守茶歌」詩に「山中茗、早春枝、萌芽採擷為茶時」(『経国集』卷一四)とある。ここは、韓愈「和侯協律詠筍」詩に「萌芽防寢大、覆載莫偏恩」とあるように、「筍」を竹の萌芽と言った。またタケノコの異名に「竹萌」「竹芽」があり、梁・劉孝綽「饒張惠紹応令詩」に「竹萌始防露、桂挺已含芳」、張籍「春日行」詩に「春日融融池上暖、竹牙出土蘭心短」とある。孝子 その父母に孝養を尽くす息子。『礼記』内則に「曾子曰、孝子之養老也、樂其心、不違其志、樂其耳目、安其寢處、以其飲食忠養之。孝子之身終。終身也者、非終父母之身、終其身也」とあり、桑原腹赤「奉和傷野女侍中」詩に「孤墳対月貞女破、関水咽雲孝子泉」(『文華秀麗集』卷中)、菅原道真「仲春釈奠聽講孝経同賦資事父事君」序に「孝子之門、必有忠臣。臣子之道、何異」(『菅家文章』卷二)とある。ここ

集六八二) など、八代集の後である。ただ、「梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも」(万葉集五八二四)「み園生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は降りつつ」(万葉集一九四二八六)、「いかにせむしづがそのふのおくの竹かきこもるとも世中ぞかし」(新古今集一七一六七三)などのように、その存在は万葉集から認められる。わけまどふかな 「わけ」については、五六番歌【語釈】「別け来れば」の項、「まどふ」については、二五番歌【語釈】「まどひ増される」の項をそれぞれ参照。「わけまどふ」は万葉集にも八代集にも見当たらず、類似の「わけまよふ」が後の「わけまよふ野原の霧の下露に涙ならでも袖はぬれけり」(続千載集四四三三)に見られるのみである。「わく」を前項とする複合動詞としては、八代集に「わける・わけく・わけすぐ・わけすつ・わけそほつ・わけなす・わけゆく・わけわぶ」など用いられているが、最後の「わけわぶ」を除き、前項と後項は、わけて、あるいは、わけながらする、という関係にある。それにたいして「わけわぶ」は「わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれなりけり」(千載集二七一四四)「尋ねきてみちわけわぶる人もあらじいくへもつもれ庭の白雪」(新古今集六一六八二)などを見てもわかるように、わけることに

『新撰万葉集』注釈稿(上巻・冬部・九五〜九七)

は、その孝子の代表の一人であり、『孝子伝』にも収載される呉の孟宗のこと。なお、【補注】を参照のこと。 祈天
【尚書】召詔に「王其徳之、用祈天永命」、「惟恭奉幣、用供王、能祈天永命」とある言葉に基づく語。「祈」は、祈り求める、の意。杜預「春秋左氏伝序」に「若乎王能祈天永命、紹開中興、隱公能弘宣祖業、光啓王室、則西周之美可尋、文武之跡不墜」(『文選』卷四五)とあり、元稹「痞臥聞幕中諸公徵樂會飲因有戲呈三十韻」詩に「布卦求無妄、祈天願孔皆」とあるが、用例は極めて限られる。『日本後紀』大同四年四月の「上表陳讓」に「冀日復嘗葉、祈天遠寿、佇昇平於半武、濫庶績於一簣」とある。 得筍多 タケノコは、「筍」または「笋」と書く。梁・蕭琛「餞謝文学詩」に「春筍方解籜、弱柳向低風」、梁簡文帝蕭綱「晚景納涼詩」に「横階入細笋、蔽地湿輕苔。草化飛為火、蚊声合似雷」、良岑安世「五言暇日閑居」詩に「春風読楚詞。…初笋篁辺出、遊糸柳外飛」(『経国集』卷一一)とあるように、早春から初夏に掘り取って、焼いて食べるのが一般。 殖物
「物産」というに同じ。その土地の産物。皇甫謐「三都賦序」に「考分次之多少、計殖物之衆寡」(『文選』卷四五)とあり、李善は、「物之生殖也」という。ただし、ここは、後漢「楚相孫叔敖碑延熹三年五月」に「考文象之度、敬授民

わぶ、ことを表す。「わけまどふ」も同様で、わかることにまどふ、ということであろう。『新撰万葉集注釈 卷上(二)』は「雪の深い竹林をかきわけていき、どこに筍があるか探しあぐねてさまよっていることだ」と釈するが、「まどふ」の意味が不適切であるのみならず、複合動詞として成り立たない解釈である。

【補注】

当歌は和歌としてきわめて異質であり、当詩【補注】にあるように、孝子・孟宗に関する逸話をふまえて作られたとしか考えられない。それにより、「君」が誰であるか、なぜ「雪深き」冬にタケノコを求めるのかも、はじめて了解される。

【語釈】「君が為」の項に挙げた「君がため浮沼の池の菱摘むと我が染めし袖濡れにけるかも」（万葉集七一・二四九）「君がため山田の沢にまぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」（万葉集一〇一・八三九）、「君がため春ののいでてわかなくつむわが衣手に雪はふりつつ」（古今集一一・二一）などならば、女性が特定の男性のために苦労しながら食べ物を手に入れるという現実的な状況が想像できるが、当歌の場合はそもそも到底、入手不可能な状況設定であるから、孝子伝のような、特別な関係や目的・事態を想定しない

時、聚藏於山、植物於藪」、魏・阮籍「元父賦」に「地下沈陰兮受氣匪和、太陽不周兮植物靡嘉」とある如く、ものを植える、繁らせる意の動詞。異文「残物」では意味をなさない。冬園 冬の畑。「園」は、果樹・野菜などが植えられた畑兼庭のこと。「冬園」の用例は知らないが、晋「子夜四時歌・春歌二十首其十四」詩に「春園花就黄、陽池水方淥」、韋応物「題鄭拾遺草堂」詩に「秋園雨中緑、幽居塵事違」などがある。異文「冬園」では意味をなさない。前項と同様、字形の類似から来る誤写であろう。何事苦 「何事」は、どうして、なにゆえ、の意の口語。本集三〇番詩【語釈】該項参照。ここは、反語。梁簡文帝蕭綱「和人愛妾換馬」詩に「功名幸多種、何事苦生離」、岑參「春尋河陽陶処士別業」詩に「南橋車馬客、何事苦喧喧」とある。異文「芳」は、字形の類似から来る誤写。帰歎 さあ、帰ろう。「歎」は、文末に用いる場合は、疑問または詠嘆の助字。【広韻】に「語末之辞、亦作与」とあるように、異文「与」と同じで、この用法の場合は平声で読む。【論語】公冶長に「子在陳曰、帰与、帰与。吾党之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之」とあるに基づく語。王粲「登樓賦」には「昔尼父之在陳兮、有帰与之歎音」（『文選』卷一一）とあり、李善はその【論語】を出典とする。また、同じ事柄を、

かぎりは成り立ちえない。

「竹のそのふ」が皇室をさすことはあるものの、当歌の文脈にはそぐわない。また、タケノコの採取ということを考えても、地表の近くまで成長する春遅くなつてからのことであり、まだ冬で、しかも雪深いのであれば、探しようもないのである。

しかし、そうすると、当歌の主題・趣意は何なのかという問題がある。歌末の「かな」の詠嘆は、途方に暮れることにたいしてであり、そこで終わつてしまい、後の奇跡的な展開がない。考えられるとすれば、孝子伝の逸話における、件の一シーンを絵にしたものに付した歌という可能性である。これならば、それなりに完結した内容といえよう。

※柳詩に「春到尚開旧時色、看過行客幾回久」（『文華秀麗集』巻下）、菅原道真「題駅樓壁」詩に「為問去來行客報、讚州刺史本詩人」（『菅家文章』巻四）とある。「帰歎行客」とは、孔子のことで、この時六十歳前後であつたと言われる。哭還歌「哭」とは、弔問の儀礼で、悲しみの声を上げて泣くこと。『論語』先進に、「顔淵死。子哭之慟。從者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之為慟、而誰為」とあり、また『論語』先進「顔淵死。子曰、噫、天喪予。天喪

『孟子』尽心下は「万章問曰、孔子在陳曰、盍歸乎來」と表

記する。この語は、孔子が諸国周遊の旅に出て十三年目、自説の天下に行われないのを嘆き、陳の国にあつて故国の魯に帰ろうと決心した際に発した言葉として、以後詩人たちの囊中に長く留められた。漢・李陵「贈蘇武別詩」に「鍾子歌南音、仲尼歎歸与」とあり、菅原道真「夏夜於鴻臚館饒北客歸郷」詩に「帰歎浪白也山青、恨不追尋界上亭」（『菅家文章』巻二）とある。異文「婦郷」は、字形の類似から来る誤写。行客 旅人。「行子」「遊子」「過客」なども。

「古詩一九首其三」詩に「人生天地間、忽如遠行客」（『文選』巻二九）、梁簡文帝蕭綱「泛舟橫大江」詩に「行客誰多病、当念早旋歸」とあり、藤原冬嗣「奉和河陽十詠 故関※

予」とある。顔淵の死は、孔子の七一、二歳のことといわれる。「還」は、時間的にあまり間をおかないことを表す助字。引き続き。杜甫「日暮」詩に「羌婦語還哭、胡兒行且歌」、白居易「放言五首其四」詩に「誰家第宅成還破、何処親賓哭復歌」とある。「歌」は、『史記』孔子世家に「明歳、子路死於衛。孔子病、子貢請見。孔子方負杖逍遙於門、曰、賜、汝來何其晚也。孔子因歎、歌曰、太山壞乎。梁柱摧乎。哲人萎乎。因以涕下。謂子貢曰、天下無道久矣。莫能宗

子。夏人殯於東階、周人於西階、殷人兩柱間。昨暮予夢坐奠兩柱之間。予殆殷人也。後七日卒」とある、その「太山壞乎。梁柱摧乎。哲人萎乎」という孔子の、死を目前にして歌ったこと。孔子が七三、四歳のこととする。いずれも、魯に帰ってからの、愛弟子たちの死に際しての孔子の絶望にも似た嘆きである。なお「歌」と「哭」は、陳子昂「同旻上人傷寿安傅少府」詩に「杳杳泉中夜、悠悠世上春。幽明長隔此、歌哭為何人」、杜甫「写懷二首其一」詩に「万古一骸骨、隣家遞歌哭」、白居易「清明日登老君閣望洛城贈韓道士」詩に「風光煙火清明日、歌哭悲歡城市間」というように、基本的には相反するものであり、「歌」が生喜びをうたうもの、「哭」が死の悲しみを訴えるものであることは言うまでもない。だから『論語』述而に「子食於有喪者之側、未嘗飽也。子於是日哭、則不歌」というのである。しかし、それと共に「歌」は時に「挽歌」の語もあるように、死者を悼む歌となる場合があり、杜甫「旱行」詩に「歌哭俱在曉、行適有期程。孤舟似昨日、聞見同一声」、白居易「寄唐生」詩に「歌哭雖異名、所感則同歸」とあるような句も生まれることになり、類似の意味を持つ場合があり、ここもそれ。

「哭」の異文「笑」は、草体の類似から来る誤写。

【補注】

韻字は、「芽」（下平声九麻韻）、「多・歌」（下平声七歌韻）で、前者は独用だから、押韻に傷があることになるが、起句の句末はいわゆる踏み落としと考えれば、問題は無い。平仄には基本的誤りは無い。

孝子・孟宗に関する逸話は、以下の文献に収載されるものが代表的なものである。

・『白氏六帖』孝感に「孟宗泣而冬笋出」として、「孟宗後母好笋、令宗冬月求之。宗入竹林慟哭、笋為之出」と双行注がある。

・『藝文類聚』竹に「楚国先賢伝曰、孟宗母嗜筍。及母亡、冬節將至。筍尚未生、宗入竹林哀歎、而筍為之出、得以供祭。至孝之感也」とある。

・『蒙求』孟宗寄鮓の注文の末尾に「楚国先賢伝曰、宗母嗜筍、冬節將至。時筍尚未生、宗入竹林哀歎、而筍為之出、得以供母、皆以為至孝所感。仕孫皓至司空」とあるが、いわゆる古注『蒙求』には、標題「孟宗寄鮓」に関する話柄が載るのみで、この話柄を収載するものはない（池田利夫編『蒙求古註集成』）。

・以上の孟宗の故事について、今本『三国志』呉志・孫皓伝の裴松之注所引の『楚国先賢伝』には、「楚国先賢伝曰、

宗母嗜筍、冬節將至。時筍尚未生、宗入竹林哀嘆、而筍為之出、得以供母、皆以為至孝之所致感。累遷光祿勳、遂至公矣」とある。

・なお、幼学の会編『孝子伝注解』（汲古書院）に詳細な注解があるので、それを参照されたい。

「孟仁字恭武、江夏人也。事母至孝。母好食笋、仁常勸採笋供之。冬月笋未抽、仁執竹而泣。精靈有感、笋為之生。乃足供母。可謂孝動神靈感斯瑞也。」（陽明本『孝子伝』）

「孟仁者江夏人也。事母至孝。母好食笋、仁常勤供養。冬月無笋。仁至竹園、執竹泣。而精誠有感、笋為之生。仁採供之也。」（船橋本『孝子伝』）

また、この逸話を作品に利用した唐詩には、以下のものがあるが、未だ六朝詩には見出していない。

・「遠伝冬筍味、更覺綵衣春」（杜甫「奉賀陽城郡王太夫人恩命加鄧国太夫人」詩）

・「旧径已知無孟竹、前溪応不浸荀星」（方干「題故人廢宅二首其二」詩）

・「筍非孝子泣、文異湘靈哭」（陳陶「題僧院紫竹」詩）

・「靈泉巧鑿天孫渚、孝筍能抽帝女枝」（趙彦昭「奉和初春幸太平公主南莊応制」詩）

・「非時応有筍、間地尽生蘭」（皇甫冉「劉侍御朝命許停官

【新撰万葉集】、注釈稿（上巻・冬部・九五〜九七）

婦侍」詩）

*「撫桐未慰孫枝思、養笋難堪母竹情」（兼明親王「天元四年夏和小童傷亡之詩」『扶桑集』卷七）

さて、補説すべきは後半の二句の解釈である。『新撰万葉集注釈 巻上(二)』は、前半の孝子伝の世界をそのまま引継ぎ、「（その例もあり、故郷に帰って）冬の畑にものを植えるのに何の苦しさがあるうか。「帰らんかな」と旅人は（故郷を思って）泣き、そして歌った。」と解釈する。しかし、この解釈にはいくつかの疑問がある。

一、なぜ旅人は故郷に帰って、わざわざ冬の畑にものを植えるなければならないのか。

二、なぜ旅人は、故郷を思って「哭」す必要があったのか。

郷里の親が死んだのだろうか。それなら、親孝行のために冬の畑にわざわざものを植える必要はない。

三、その解釈の基になったと思われる、白居易「放言五首其

四」詩の「誰家第宅成還破、何処親賓哭復歌」という一節も、後句は、一体どこの親族や賓客だ、葬式で哭した

かと思うとすぐに宴会で歌っている、という意味で、世間の不条理・無常を告発非難する内容である。

稿者は、これらの疑問に納得できる解答を得られなかった。そこで改めて前半二句を見直して、次のようなことを考

えた。

孟宗の逸話は確かに孝行息子のそれであるが、詩の作者はそれを本来の「孝」の話として用いたのではないのではないか。本来あり得ないことが、天に祈ることで実現できる、あるいは人の善行を天は見えて必ず報いてくれる、ということとを言うための材料として用いたに過ぎないのではないかということである。すなわち、改めて後半二句の意味を極言すれば、次のようになる。

以上のように、冬の畑での栽培など何の苦しさもない。それよりも、かの孔子は絶望して郷里に帰った後、愛弟子にも

先立たれる不幸の中で亡くなったけれども、最終的に彼の名前が残ったということは、彼が生前「君子病没世而名不称焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉（君子は自分の世が終わって、その名が称せられないのを悩むのだ。名が称せられないことは、わが道が世に行われぬということ、わしは、どうして自分自身が後世に名を顕すことになり得ようや）」（『史記』孔子世家）と言っていたことからすれば、彼の道が世に行われたということであり、それは天が孔子を見捨てなかつたということだろう。

【比較・対照】

当歌詩は、孝氏伝の逸話を素材とする点で共通する。当歌から、それを読み取り、詩に写すことは容易であつたらう。ただ、歌の表現内容がそのまま対応するのではなく、相当する詩の前半が、歌では途中で終わった逸話の続きを示すという形で呼応しているといえる。このような歌詩の対応関係は、本集のこれまでには見られなかつたケースであり、当時広く知られた逸話だつたからこそ可能だつたと考えられる。

しかし、当詩はその逸話を例とするだけでなく、難解な後半に中心があるかのように構成されている。この部分には、歌にはまったく関わりのない内容が付加されているが、前半と後半を整合させるために、詩【補注】が提案する、孝ではなく天の報いという、主題のとらえ直しとするならば、それを導きだしたのは、他ならぬ当歌の持つ一種の非現実性・無謀性ではないだろうか。

歌【補注】で検討したように、当歌の中心を「わけまどふかな」にあるとみなすには、何らかの前提が示されなければ、不

自然であり、詩の起句の反語表現は、それになりたいする即座のツツコミとすることもできる。そして、そのような非現実的な状況における無謀な行為にもかわらず、というところにポイントが置かれるのである。

実は、この「にもかかわらず」という条件は、当歌はもとより、詩の起句・転句・結句にそれぞれ示されるのにたいして、結果が明示されるのは当歌および詩の起句にたいする承句のみである。結句の結果もまた、孔子の伝記から引き出されたとしたら、残るのは転句だけである。その結果が収穫とするならば、「殖物冬園何事苦」という反語表現は、そのまま本歌の「わけまどふ」者にたいする叱咤激励になっているのではないだろうか。

このように考えてみると、当歌詩は、合せて孝氏伝の逸話を完結させるだけでなく、問答のような関係にもなっていると見ることができる。もつとも、そうすると、詩の結句だけが浮いてしまうことになるが。

97 攪散芝 散花砥而已 降雪者 雲之城之 玉之散鴨

かきくらし 散る花とのみ 降る雪は 雲のみやこの
玉の散るかも

97 素雪紛紛落蕊新。素雪紛紛として落蕊新なり。

応斯白玉下天津。斯れ白玉の天津より下るなるべし。
挙眸望処心如夢。眸を挙げて望む処心夢の如し。
霽後園中似見春。霽れて後園中春を見るに似たり。

【校異】

本文では、初句の「散」を、永青文庫本と久曾神本は

【校異】

「崩」とする。第二句の「散」を、類従本・林羅山本・和学講談所本・無窮会本は欠き、同句の「雪」を、類従本・林羅山本・和学講談所本・無窮会本は「白雪」とする。

「紛紛」を、文化写本・藤波家本「粉粉」に作り、「落蕊新」を、天理本・林羅山本・無窮会本「落葉新」に作る。「応斯」を、永青文庫本・久曾神本「応是」に作る。「心如夢」を、道明寺本・京大本・大阪市大本・天理本「以如夢」

訓では、初句を底本はじめ付訓のあるテキストはすべて「かきくらし」とするが、【語釈】該項に述べる理由から、「かきくらし」と改める。第二句を、林羅山本と無窮会本は

を、類従本・藤波家本・和学講談所本・道明寺本・京大本・

「はなどのみふる」とする。結句の「城」の左訓に、永青文庫本と久曾神本は「さかひ」とする。

同歌は、寛平御時后宮歌合（十・二十卷本、冬歌、一四四番）にあり（ただし初句「かきくらし」第四句「ふゆの都の」、結句が十卷本では「雲の散るか」と二十卷本では「花とみるかも」）、また夫木抄（卷一八、冬部三、七二六六番）に「寛平御時后宮歌合 読人不知」として（ただし初句「かきくらし」第四句「冬のみそらの」結句「くもやちるかも」）、同（卷三〇、雑、都、雲のみやこ、一四二〇二番）に「題不知 新撰万葉 読人不知」として見られる（ただし初句「かきくらし」第二句「花とのみふる」第三句「しら雪は」）。

【通釈】

（空二面を）覆うようにして、さながら散る花のように降る雪は、（実は）雲の都にある玉が散るのであろうか。

【語釈】

かきくらし 本集諸本の訓として示す「かきちらす」という複合動詞は、万葉集にも八代集にも見られない。日本国語大辞典（第二版）はこの語を立項するが、その用例として当歌のみを掲げる。本集諸本には異訓が見られないにもかかわらず、「かきくらし」とする理由は、以下のとおりである。

大阪市大本・天理本・林羅山本・無窮会本「霜後」に作り、「霽」を異本注記するものが多い。「園中」を、道明寺本・京大本・大阪市大本・天理本・永青文庫本・久曾神本「園中」に作り、「似見春」を、類従本・藤波家本・和学講談所本・道明寺本・京大本・大阪市大本・天理本・林羅山本・無窮会本・永青文庫本・久曾神本「似見春」に作り、多く「似」を異本注記する。

【通釈】

白い雪が紛紛と降り乱れて、まるで花びらが落ちはじめたばかりのように見える。それはきつと白い宝玉が天の川から降ってきたのに違いない。眸を上げて遠くを眺めると（降り続く雪が立ちこめてぼうつとして）心はまるで夢を見ているかのようにだ。雪が降り止んだ後には、庭の中は（真っ白な花びらが散り敷いたように）春景色を見ているようになるだろう。

【語釈】

素雪 「白雪」（八五番詩）と言うに同じ。曹植「朔風詩」に「今我旋止、素雪雲飛」（『文選』卷二九）、太宗皇帝「望雪」詩に「凍雲宵遍嶺、素雪曉凝華」とあり、仁明天皇「閑庭对雪」詩に「玄雲聚万端、素雪颺宮中」（『経国集』卷一三）とある。紛紛 乱れ散る様。本集五六番詩

一つは、八三番歌の「攪崩芝」を「かきくづし」ではなく「かきくらし」にした理由と同様である。本歌においては、第二句にも見られる「散」字と、あくまでも表記かつイメーヂ上の関連性を持たせようとしたものと見られる。もう一つは、寛平御時后宮歌合をはじめ他集ではすべて「かきくらし」になっているからである。その用法の一般性・妥当性については、八三番歌【語釈】「かきくらし」の項で述べたとおりであり、この語は直下の「散る」ではなく、第三句の「降る」を修飾する。三つめには、「かきくらし」と訓むとすると、一首の中で「ちら」「ちる」「ちる」と同語が三度も反復されるからである。これがリズムを意図したとは考えがたい。散る花とのみ「降る雪」を「散る花」に見立てる歌については、二一番歌【語釈】「花とや見らむ」の項で取り上げてある。「散る」が直接「花」を連体修飾する例は、万葉集には「み園生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ」（万葉集一七・三九〇六）の一例があり、この場合は「散る花」を「雪と降り」のように、雪に見立てている。八代集には「山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人は見るらん」（後撰集三九〇）「はるさめにちる花みればかきくらしみぞれし空の心ちこそすれ」（千載集二・八二）「山たかみ嶺のあらしにちる花の月にあまぎるあけが

『新撰万葉集』注釈稿（上巻・冬部・九五〜九七）

【語釈】該項参照のこと。なお、本集一一二番詩にもある。張衡「四愁詩四首其四」詩に「我所思兮在鴈門、欲往從之雪紛紛」（『文選』卷二九）とあり、李善は「楚辭」九歎・遠逝に「雪紛紛而薄木、雲霏霏而隕集」とあったという。ただし、今本は「雰雰」に作るも、音義同じ。藤原道雄「詠雪」詩に「紛紛白雪從千里、熒熒灑灑一何斜」（『凌雲集』）、菅原道真「雪中早衙」詩に「風送宮鐘曉漏聞、催行路上雪紛紛」（『菅家文章』卷一）とある。異文「粉粉」では、平仄が合わない。落蕊新「蕊」は、花のこと。本集六三番詩【語釈】「萼初開」の項参照。梁・蕭瑄「春日貽劉孝綽詩」に「新禽爭弄響、落藥亂自從風」、駱賓王「春晚從李長史遊開道林故山」詩に「落蕊翻風去、流鶯滿樹來」とあり、小野岑守「雜言於神泉苑侍讌賦落花篇應製」詩に「此時澹蕩吹和風、落藥因之滿遠空」（『凌雲集』）とある。また、武元衡「唐昌觀玉蕊花」詩に「琪樹芊芊玉蕊新、洞宮長閉綵霞春」とある。異文「落葉新」では、比喩として不適である上、現実の季節とも適合しない。応斯 きっとくに違いない。本集一三番詩【語釈】該項参照。九九番詩にも。類句「応是」は、一六・六三・一〇七番詩にあり。白玉 白い色の玉石のこと。『礼記』月令に「孟秋之月、…（天子）衣白衣、服白玉」とある。また、謝惠連「雪賦」に「亂曰、白羽雖白、

たの空」(新古今集二・二三〇)などあり、いずれも「散る花」が雪・霰・霧などに見立てられていて、当歌のような逆の見立ては見られない。ただし、千載集の「かきくらし」や新古今集の「あまぎる」など、本歌の「かきくらし」に通じる語が用いられている点に留意しておきたい。降る雪は「降る」が直接「雪」を連体修飾する例は、万葉集では「散る花」よりもはるかに多く見られ、「春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る」(万葉集五・八三九)「我がやどの冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも」(万葉集八・一六四五)「梅の花それとも見えず降る雪のいちしろけむな間使ひ遣らば」(万葉集一〇・二三三四)などのように、「降る雪」と「梅の花」が関係付けられている例がある。八代集にも「ふる雪はかつもけななむ梅花ちるにまどはず折りてかざさん」(後撰集一・四五)「ふる雪に色はまがひぬ梅の花かにこそにたる物なかりけれ」(拾遺集一・一四)「春の日ののどけき空にふる雪は風にみだるる花にぞ有りける」(金葉集(異)六六八)「あさまだきみのりのにはふる雪はそらより花のちるかぞぞみる」(千載集一九・一二四八)「ふる雪に色まどはせる梅の花鶯のみやわきて忍ばん」(新古今集一六・一四四二)など、同様の例が見られるが、当歌との関係では、金葉集や千載集の「空」を背景と

質以軽兮。白玉雖白、空守貞兮。未若茲雪、因時興滅」(『文選』卷一三)とあり、李善は『孟子』告子上に「孟子曰、生之謂性也、猶白之謂白与。曰、然。白羽之白也、猶白雪之白、白雪之白、猶白玉之白歟」とあるを引き、更にその劉熙注には「孟子以為白羽之白性輕、白雪之性消、白玉之性堅、雖俱白、其性不同。問告子、告子以為三白之性同」とあったという。恐らく「白雪」と「白玉」の連想や見立ては、これらを嚆矢とするが、白居易「雪夜喜李郎中見訪兼酬所贈」詩に「十分滿醞黃金液、一尺中庭白玉塵」とある他は、意外に少ない。なお、雪を玉と見立てる例は極めて多く、玉と露の見立ては、四四・四八・(六二)番詩に、雪と玉塵が八二番詩にあつた。大枝永野「詠雪」詩に「榭樓皆白玉、草樹総花梅」(『経国集』卷一三)、島田忠臣「敬和源十七奇才歩月詞」詩に「清夜徘徊白玉場、身輕目極渺雲郷」(『田氏家集』卷下)とあり、前者は雪の、後者は月光の比喻。下天津「津」は、渡し場の意。「天津」とは、天の川の渡し場のことで、天の川を横切る九つの星のこと。屈原「離騷經」に「朝發軔於天津兮、夕余至乎西極」(『文選』卷三二)とあり、「天津、東極箕斗之間、漢津也」と王逸はいう。許敬宗「奉和喜雪応制」詩に「何如御京洛、流霰下天津」とある。「下」は、落下すること。都良香「代渤海客上

する表現が注目される。雲のみやこの「雲(くも)」も「みやこ」も、それぞれは万葉集・八代集とも数多く見られるが、「雲のみやこ」と熟した表現は一例も見出せない。それどころか、ともに詠まれることさえほとんどなく、わずかに「みやこをばあまつそらともきかざりきなにながむらん雲のはたてを」(新古今集一〇一九五九)「都より雲の八重たつおく山の横河の水はすみよかるらむ」(新古今集一八一七一一八)が見られるくらいである。これらも当歌とはまったく関わりがない。想像上の場所として「雲のみやこ」に近い例としては「ながめつつおもふもさびし久方の月の都のあけがたの空」(新古今集四三三九二)が挙げられるが、設定が異なる。『新撰万葉集注釈 卷上(二)』は、この語は「玉京」と呼ばれる崑崙山のことをさすかという。結句に出てくる「玉」と「みやこ」を詠み込む歌も、万葉集・八代集に見られないことから、本歌の下句はもともと和歌的な発想に基づくものではないと考えられる。【校異】に示したように、同歌を寛平御時后宮歌合では「ふゆの都」とし、夫木抄(七二六六番)では「冬のみそら」とするのも、そのなじみがたさによる改変であろう。ただし、夫木抄のもう一首(一四二〇二番)は、都の一例の「雲のみやこ」という項の歌として挙げられ、当歌の下句がそのまま生かされている。

『新撰万葉集』注釈稿(上巻・冬部・九五〜九七)

右親衛源中郎将」詩に「渤海朝宗婦聖沢、願君先道入天津」(『扶桑集』卷七)、大江以言「水清似晴漢」詩に「浪澄柳巷天津靜、砂徹菊潭星渚幽」(『類題古詩』清)とある。挙眸 視線を上げて遠くを見ること。本集八六・八七番詩【語釈】該項参照。望処 「処」は、軽い添え字で、すとの意。唐代以後の詩に用いられる俗語。張九齡「和崔尚書喜雨」詩に「聽中声滴瀝、望処影徘徊」、章孝標「西山広福院」詩に「日斜登望処、湖畔一僧歸」とあり、島田忠臣「秋暮傍山行」詩に「昨日出郊信宿歸、回頭望処入雲微」(『田氏家集』卷中)、菅原道真「九日侍宴群臣獻寿應製」詩に「登高望処九陽重、天道人心髮不容」(『菅家文章』卷五)とある。心如夢 心持ちはまるで夢を見ている時のようだ。『毛詩』王風・黍離に「行邁靡靡、中心如醉」、白居易「求分司東都寄牛相公十韻」詩に「忽忽心如夢、星星鬢似糸」とある。後者は茫然自失の様。菅原清公「奉和春閨怨」詩に「心如煎、眼不眠」(『文華秀麗集』卷中)、菅原道真「客館書懷同賦交字寄渤海副使大夫」詩に「度春欲見心如結、專夜相思睫不交」(『菅家文章』卷五)とある。異文「以如夢」は、まだ意味的に可能だが、「如心夢」は、成立しないだろう。霽後 雪が降り止んだ後。本集六七・八八番詩【語釈】該項参照。江淹「雜體詩三十首・謝法曹贈別

同項ではもう一例、長恨歌の「忽開海上有仙山」という句題で、大宰大貳高遠卿の「たづねずはいかでかしらんわたつうみの浪まに見ゆる雲のみやこを」を掲げる。これはむしろこの語がいかにか珍しかったかを示すといえる。玉の散るかも

「玉」および、それと結び付く「散る」について、さらに、「玉」が「露」の見立てであることについては、四四番歌【語釈】「玉ぞ散りける」の項および【補注】を参照。同じ見立ては四八・六二番歌にも見られる。それにたいして、

「玉」が「雪」の見立てとなる例は、万葉集にはもとよりなく、八代集で確認できるのは「花とちり玉とみえつつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける」（新古今集一八一・六九五）のみである（ちなみに、この例は、雪を花と玉の双方に見立てている点で、当歌と共通する）。古今和歌六帖（巻七、天、雪、八六首）や夫木抄（巻一八、冬部三、雪、二一〇首）などを一覽しても、花に見立てる歌はいくつも見出せるが、玉の例はない。当詩【語釈】「白玉」の項に述べるように、漢詩には玉への見立てがきわめて多いとすれば、これもまたそれに倣ったものであろう。

【補注】

当歌は、降る雪を、花と玉の両方に見立てていることになりが、表現の展開に即せば、花とばかり思った雪が、実はそ

恵連」詩に「幸及風雪霽、青春滿江皋」（『文選』巻三一）、皮日休「公齋四詠 小桂」詩に「影澹雪霽後、香泛風和時」とある。異文「霜後」は、成立しないことはないが、文脈を重視すれば、ここで「霜」が来るのは唐突の感を免れない。園中 庭園の中。「長歌行」に「青青園中葵、朝露行日晞」（『文選』巻二七）、白居易「讀史五首其三」詩に「春華何暉暉、園中發桃李」とあり、巨勢識人「和野村史觀關百草簡明執之作」詩に「聞道春色遍園中、閨裡春情不可窮」（『文華秀麗集』卷下）とある。異文「閨中」は、前項の異文と同様非。似見春 春景色を見るのに似ている。

「似見春」の語句は、その例を知らないけれども、司空曙「歲暮懷崔峒耿漳」詩に「臘月江天見春色、白花青柳疑寒食」、東方虬「昭君怨三首其三」詩に「胡地無花草、春來不似春」などとあるのを見れば、「春」とは、春の風景のこと。雪景色を春の光景に見立てるのは、岑參「和祠部王員外雪後早朝即事」詩に「長安雪後似春婦、積素凝華連曙暉」、張繼「會稽郡樓雪霽」詩に「江城昨夜雪如花、郢客登樓齊望華」、竇鞏「早春松江野望」詩に「江村風雪霽、曉望忽驚春」などとある。異文「仮」の旧字の草書体は、「似」と酷似する場合がある。

うではなく、玉のようだったということになる。つまり、花から玉への見立ての変更であり、【語釈】に挙げた「花とちり玉とみえつつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける」（新古今集一八一―一六九五）の、両立する場合は異なるのである。

その変更のきっかけとなったのは何か。見立て自体を、ありきたりなものではなく、珍しいほうを良しとしたと考えられなくもないが、それよりも、対象となる雪の質量のとらえ方が変化したからではないだろうか。おそらくは梅の「花」と、「玉」しかも雲の都の玉とを比べれば、後者のほうが、その白の輝きや大きさ・丸さ、そして量・範囲が圧倒的に勝ると考えられる。まさにその点において、当の雪の降る様子にたいし、花よりも玉の見立てのほうが適切ととらえ直す過程を示した歌と見ることができる。雪の降り方が変化したの※

【比較・対照】

当歌における、花への見立ては詩の起句に、玉への見立ては承句に、つまり詩の前半に写されている。この二つの見立てを、当詩【補注】のように「微視的な視点から巨視的な視点への移動」ととらえるならば、当歌【補注】で述べたのとは異なるものの、同時成立の見立てではないという点で共通しよう。

詩の後半において、転句に示された、光景の圧倒感、歌にもあてはめることができる。結句は起句の見立てにつながるといふ意味では整合的であるものの、結果的に詩全体としては、花の見立てのほうに重点を置く趣になった点は、歌とは異なる。

【補注】

韻字は「新・津」（上平声十七真韻）と「春」（上平声十八諄韻）で、両者は同用。平仄にも基本的誤りは無い。

降りしきる雪を、落花にたとえる起句と、それを更に天の川から落下する白玉にたとえる承句。微視的な視点から巨視的な視点への移動。そして、「拳眸望処」と視点を転換する転句。更に結句では、雪が止んだ後、日光に輝く雪景色を春の光景として思い遣るという形で、一応の纏まりを見せている。起句の暗喩を含めて、「応斯」「如」「似」と、まるで比喩のオンパレードではあるが。

※に伴ってという見方もできようが、本歌の表現からは、そのような時間性までを読みとることは困難である。

る。

この歌と詩の関係で一つ気になるのは、歌の「雲のみやこ」をなぜ「天津」に変えたのかということである。漢詩において「天津」と「白玉」との結び付きが強いことなら、それなりに説明も付くだろうが、「雲のみやこ」に置き換えられた「玉京」ほどであろうか。そもそも「雲のみやこ」が白詩語に由来するとすれば、余計に不審である。あるいは、だからこそあえて変えてみたという可能性も考えられなくはない。

〔注〕 本稿は、『共立女子大学文芸学部紀要』第四〇集～第五六集（平成六年二月～平成二二年一月、ただし第四四集を除く）および『東京工業高等専門学校研究報告書』第二六号～第四二（一）号（平成六年二月～平成二二年二月）の続稿である。資料および注釈に関する凡例は、最初の『共立女子大学文芸学部紀要』第四〇集を参照されたい。